

雨乞の灯火風流 幕末兵庫津の事例

福原敏男

A Refined Lantern Procession to Pray for Rain

はじめに

- ① 雨乞の火祭り
- ② 近世都市兵庫津
- ③ 『嘉永五子年六月 福原雨乞記』
おわりに

【論文要旨】

嘉永五年（一八五二）六月三日夜より三夜連続して、兵庫津の二七の町々（現在の神戸市兵庫区の二六町と中央区の相生町に相当する）が雨乞を目的として、西国街道を舞台に一大灯火行列を繰り広げた。本稿では、その光と色彩と音のページェントともいべき造り物風流を取り上げて、その風流史的意義について考察する。

雨乞というと連想されるのは修験者の祈禱など、すぐれて宗教的な行為である。しかし、本稿で取り上げる雨乞は、危機儀礼というにはあまりに華美であり、新出の『嘉永五子年六月 福原雨乞記』（神戸市立博物館蔵）の挿絵を見ると、あたかもテーマパークにおけるイベント・パレードを見るような、心うきうきする楽しさがある。それはまた、観客の視線を意識した祭礼行列のようでもある。

同書巻末によると、惣人数一万三百人あまり、ほかに北浜と南浜の町より加勢人足約五〇〇〇人、松明二二〇〇、半鐘四〇七、太鼓三〇四、大鈞鐘四、八丁鉦三〇、法

螺貝六三、弓張提灯七二〇が参加したと記される。一般的に、村落の雨乞いの方
法として、村中の人々が鉦・太鼓・法螺貝などを鳴らしながら、松明を持って行列を
作って氏神などを出発して村を一周し、近くの霊山に登り、河原に降りてきて松明を
積んで燃やす千本松明行事が知られる。兵庫津の事例はその都市版と想定できるが、
兵庫津の内でも、農民が集住する「地方十八町」のうち一六町が参加しており、日照
りは農業にとって深刻であったことをうかがわせる。稲の生育期の旧暦六月初旬にお
ける降雨の多寡は、稲作にとって死活問題だからである。

毎年繰り返される年中行事と異なり、雨乞のような一回性の臨時の行事においては、
殊に、各町の創意工夫が発揮され、まさに風流の精神が溢れ出る行事ともいえよう。

はじめに

嘉永五年（一八五二）六月三日夜より三夜連続で、兵庫津の二七の町々（現在の神戸市兵庫区の二六町と中央区の相生町に相当する）が雨乞を目的として、一大灯火行列を繰り広げた。本稿では、その光と色彩と音のページェントともいべき造り物風流を取り上げて、その風流史的意義について考察するものである。時は開国へ向けて風雲急を告げる世情の前夜であった。六年後の安政五年（一八五八）、幕府は箱館産物会所を兵庫に開設して蝦夷地産物の専売を始め、兵庫開港が決まり、この頃から幕末情勢は急に慌しくなつてゆく。

ところで、雨乞という連想されるのは修験者の祈禱など、すぐれて宗教的な行為である。しかし、本稿で取り上げる雨乞は危機儀礼というにはあまりに華美であり、後に紹介する資料の挿絵を見ると、あたかもテーマパークにおけるイベント・パレードを見ようような、心うきうきする楽しさがある。観客の視線を意識した祭礼行列のようでもある。

柳田国男は「祭り」と「祭礼」を区別し、「祭り」から「祭礼」への歴史の変遷論を提示した⁽¹⁾。柳田はその変遷の指標を四点ほどあげているが、その一つに風流という美意識の成立がある。「風流は即ち思い付きといふことで、新しい意匠を競ひ、年々目先をかへて行くのが本意⁽²⁾」であり、見物客と参加者の、観る／観られる関係性のなかで、より派手に、華麗に飾られた祭礼に展開したという。もう一つの指標が近世の都市文化の成熟である。現在の祭礼につながる道具立て、つまり幟や提灯などの生産技術、山車製作の工芸技術の普及などの点からみると、経済の進展を背景に、各地の祭礼文化は近世に各都市で独自に工夫されていった、という。本稿において対象とする雨乞の行灯にしても、竹ヒゴや和紙などの素材で作り上げる張り子の技術が庶民まで享受できるようになったの

は近世に入つてのことである。

また、造り物や風流の研究において、守屋毅や植木行宣は早く、火の風流、灯火の風流への着目の重要性について指摘している⁽³⁾。これら先学が指摘するように、中世京都や奈良で展開した灯火の風流は先駆的なものであり、大部分は近世以降の時代的特色なのであった。

本来、祭りの時間は夜である。大門哲はいう。「行灯と電灯は、闇との接し方が大きくことなる。闇を追いやるのが電灯。たいして、闇がもつ奥深さ、厳かさをひきたてるのが行灯である。ハレの夜、行灯をとおして町は墨絵の世界にかわる」。

この文学的表現が言い尽くしているように、ろうそくによる灯りが生み出す光と影、光と影を峻別しないコントラスト、光のたゆたい、グラデーショナルな墨絵の世界は、イルミネーションで演出された美の世界とは対極にある。灯火の風流はまた、現在ハレの夜を席卷している光の彫刻、サーカス、モニュメントの「電飾の風流」や「花火の風流」ともまた異なるのである。

ハレの夜における灯り、提灯、行灯、花火、灯籠などは、祭り・芸能・イベントを彩る飾りであり、心をそぞろにし気分を盛り上げる、集客のための誘引や賑わいの演出装置として理解できる。戦前まで戦意高揚や皇室イベントへ祝意を示す定番であった提灯行列は、上記のような灯火行事の心的効果を利用した国民統合儀礼であった。灯火の行事を「神の依り代」なる生活感覚をこえた学術用語⁽⁴⁾で解説されても、すでにリアリティーを喪失している。始源的には火に伴う信仰の儀礼であったかもしれないが、現在では美しさを味わう楽しみなのである。

灯火の行事の淵源の一つは中国の中元蓮灯や灯籠流しなどの年中行事に求められ、日本の盆行事に多大な影響を与えている。さらに、近代以降の華僑文化の伝播により、中華街などにおいて行なわれる観光的ショーであるランタン・フェスティバルが人気を集めている。最近では

東京ミレナリオや神戸ルミナリエの幻想的な風景に、「火の風流」の当座性、同時代性がみられる。

ここで、伝統的な「灯火の風流」行事を理解する前提として、灯笼・行灯・提（挑）灯について整理しておきたい。『埴裏鈔』三（一四四五～四六）によると、当時すでに、灯呂（籠）・提灯・行灯の区別があったらしい。『日本国語大辞典』（小学館）第二版によると、灯笼とは油、ろうそくなどの灯明をほや、かごなどで保護する具で、『延喜式』（九二七年）などの用例では、神仏への献灯・奉灯のために用いられている。行灯は木、竹、金属製のわくに紙を張り、なかに油皿をおいて火をとます。提灯はろうそくをとすための器具である。

さて、私たちが思い起こす伝統的な「火の風流」といえば、京都五山の送り火、通称大文字焼きであろう。これらに関する芸能史的研究をすすめたのが植木行宣である。⁶⁾以下、氏の所説の要点をみてみよう。

火の行事が行なわれる心意の底には、神霊の送迎や清め、供養といった火の機能にもとづく信仰が流れている。盆に火の行事が集中する所以である。五山送り火は、万灯・万灯笼と称する盆の火の行事が大規模化したものといわれている。万灯とは数多くの灯火をもってする供養の意であり、一五世紀半ばには確認できる。その盛行の背景には、一一年に及ぶ応仁・文明の乱で犠牲になった怨霊を鎮魂し、不安定な新仏の^{あはれ}供養に重ねての鎮魂除災の願いがある。五山送り火は、万灯笼の火の意匠が「大」に固定したものであり、現在の形態に定まったのは一六世紀中頃からである。

さらに、盆行事の火の風流には贈答習俗としての細工物の盆灯笼があり、室町初期には公家社会において盛んに行なわれ、江戸時代の禁裏や本願寺における盆の灯笼展観はその風を伝えたものである。『明月記』には、竿先に高く高灯笼を掲げる鎌倉時代の民間習俗が記され、町屋ではそれがいつしか軒先に掛ける形態に変化した。盆灯笼は灯笼の造形の変

化をもたらし、華麗な切子灯笼や風流灯笼が盆を彩るようになった。それは細工の趣向を極めたもので、臣下等が主家筋に贈る場合が多く、贈答先として禁裏や將軍家にそれが集中した。風流灯笼の趣向には主題と形態の二つの側面がある。著名な故事や物語、詩歌に取材し、その景色や心を表現する主題と、灯笼を台にしその上に人形等のアヤツリを仕組んだアヤツリ灯笼等、灯笼そのものの形態である。風流灯笼には、灯笼本体を文様、図絵、透かし彫りで装飾し、舟や毬のような形に拵え、回り灯笼のように灯火を動力とする仕掛けを施したタイプと、上の造り物が主体で、灯笼はその下台という形態の二種に大別される。

以上の盆灯笼と密接なかわりをもって展開したのが盆踊りである。盆踊りは精霊供養の踊りとして室町初期から姿を現し、風流拍子物、念仏拍子物などとよばれたが、やがて盆の風流踊りとなった。これは風流の造り物としての灯笼と、囃子としての念仏が特色であった。盆の風流踊りは応仁・文明の乱が終息し、京都が町衆を主人公とする町へ再生を果した時期に展開し、天文年間（一五三二～五五）にその最盛期を迎える。この時期、灯笼に趣向を凝らし、被り物、採り物とする灯笼踊りも登場した。

中世後期に展開した風流灯笼の伝統は、民間では初盆の習俗として流布し、風流踊りや夏祭りに受け継がれた。これに対して、灯笼そのものが主役をつとめる風流灯笼は東北のネプタや北陸の灯笼山など夏祭りにおいて多様な展開を遂げている。

近世後期から近・現代の金沢を舞台としたイベント・ディスプレイの民俗学的研究を行なっている大門哲の研究も注目に値する。大門が中心となり、石川県立歴史博物館において二〇〇〇年夏に開催された「祝い絵——ディスプレイの民俗誌——」展⁷⁾はもつと注目されてしかるべき展覧会である。本展では、積む絵・灯す絵・擔ぐ絵・奔る絵の四部構成をとっており、本稿で問題とする「灯火の風流」と問題関心が一致してい

るのは、灯す絵と擔ぐ絵の章である。前者には「都市の絵行灯飾り」、後者には「『風流の火』をさぐる」と副題がつけられている。いずれも祭りの夜を彩る灯火の風流であるが、前者は軒絵行灯、七夕飾りの行灯絵、鳥居を飾る大行灯絵、街路をまたぐ巨大な絵行灯、神灯のレンガク絵、後者はキリコ・レンガク・タテモン・ヨタカなどと呼ばれる灯籠山、つまり風流の火を担ぎまわる祭礼を取り上げている。

この企画展は大門がすでに発表している実証的論文⁹⁾の研究成果の上に成り立っており、この論文の要点を以下に引用して、大門のイベント・ディスプレイ論を紹介しよう。

従来、ハレの时空のディスプレイに関しては、民俗学が主に関心を寄せてきた。その対象としては神輿や山車などの豪華なものや、注連縄・薬人形・削り掛けなど「ナチュラル」なものが中心であり、提灯・行灯・幟・幕といったありきたりなものには、関心がほとんどなかった。金沢における近世・近・現代のイベント・ディスプレイは①商店街の賑わい演出、②氏神祭礼、③公的イベント、の三種類に大別される。③こそ大門論文で一番重要な視点であり、大門は、盆正月・天満宮遷座祝賀祭・コレラ退散祭り・金沢開始三百年祭・日清戦争凱旋・旧藩祖三百年祭・尾山神社昇格慶賀祭を取り上げて、精緻な実証研究を行なっている。例えば、盆正月とは藩主の慶賀を祝うためにもうけられた休日であり、五代藩主綱紀のときに起こり、明治二年まで四四回を数え、町人はさまざまな出し物を披露した。その出し物とは、形態・絵柄・ダシ飾りなどに微妙な違いがある行灯や提灯による造り物が中心で、町ごとに趣向を競いあった。

都市の公的イベントでは一度に多くの町が参加し、そのディスプレイの競演は町内のハレ意識をもちたためだけでなく、隣町や群衆に対して自らの町の存在を誇示する意義を有し、町の存在証明装置ともなる。近世都市金沢では、武士地・町地・郡地という具合に、社会的・経済的

な属性に応じて居住区域が配列された。盆正月においてディスプレイや出し物を行なった「町中」住民は、空間的配列をこえて祝祭を催したのではない。都市「全域」が一つの劇場・舞台として一体感をもった行事ではない。「町中」住民が、催し物に威信を示しあうまでにディスプレイが過剰になったのは、一九世紀以降の番付刷り物の影響がある。盆正月では、謡曲や漢籍などをモチーフにした造り物に人気があり、幕末の行灯絵は言語遊戯を楽しみ、「ことば」がディスプレイされていた。近代の公的イベントでは「歴史絵」が多くなり、近世的「物尽くし」から近代的「物語」へと変遷していった。

植木や大門による、「火の風流・灯火の風流」論から学ぶことができるのは、前近代―信仰儀礼、近代―神無きイベント行事、などというステレオタイプの理解から解放され、各行事自体の具体的姿・形を見つめなおすことからしか、立論できないという点である。

本稿でも、幕末兵庫の事例を個別に詳細に見つめることを目的とする。

① 雨乞の火祭り

原則的には毎年繰り返される年中行事と異なり、雨乞のような臨時の行事は、まさに風流本来の、繰り返すことを前提とせず、練習を必要としない当座性、一回性を有するといえる。雨乞の儀礼はきわめて多岐にわたり、民間で行なわれてきた代表的なものを列挙しただけでも、①村人が山上や神社に籠って祈願する、②造り物の龍や神輿・仏像を水辺に遷して祈る、③特別の面（雨乞い面）を出して祈る、④大勢で千回や一万回の水垢離をとる、⑤水神のすむ伝説がある池や淵などを浚って水替えをしたり、水をかき回す、⑥水神の池や淵に、牛馬の首など不浄のものを投げ込む、あるいは汚物を洗う、⑦地蔵の像を水につける、⑧釣鐘を川や池に沈める、⑨総出で太鼓を打って雨乞踊りを踊る、⑩代表者が

特定の聖地から水種をうけてきて川や田に注ぐ、⑪山に上がって大火を焚く(千駄焚き)などがある。¹⁰⁾ 本稿で対象とする兵庫県の場合、民俗芸能として伝承されている雨乞踊りの多くは太鼓や鉦で囃し、小歌を歌って踊る風流踊りである。

渇水の緊迫した状況下に至っては芸能を奉納する余裕すらなかるうが、全国の雨乞事例をみると、切羽詰まる前に様々な手を打っている。全国的視野からの雨乞の民俗行事を通観できるのは、高谷重夫によって集大成された『雨乞習俗の研究』¹¹⁾の学恩の賜物である。

火を用いて雨を乞うという方法は、日本の雨乞習俗では最もありふれた分布の広いものの一つであるが、高谷はこれを火焚き、松明行列、神前への献灯、の三つの型に分類している。¹²⁾ 以下、高谷の研究から雨乞と火祭りに関する記述を箇条書きにしておこう。

(1)高野山、大峯山、愛宕山、金剛山、竹生島、鈴鹿峠の鈴鹿神社、秋葉山、金毘羅山などの霊山、名社、大寺から火を受けてくる事例がある。また、村で火を焚き、あるいは氏神に灯を献ずる行事も多いが、上記のような名刹大社の聖なる火を点ずる方が、一段と効果があると思われるのである。まず村で火を焚き、それで験のない場合に始めて高野山などに参るといふ事例などは、より雨乞の効果を上げるためである。

(2)火を受けに行く場合、電車が開設された後でも、徒歩で昼夜兼行したり、途中で休むことを禁じたりしたのは、苦行を重ねれば重ねるだけ、神仏の御心にかなうという信仰から来たものであろう。

(3)火焚きは最も華やかで印象の強い行事である。雨乞の火焚きを千束柴と呼ぶ地域が北摂地方から兵庫県猪名川町あたりに分布し、山上で千束の柴を焚き、「雨降れ、ジユウモンド」等と唱え、神社の周りを太鼓を叩いて巡ったという。千把焚きなどという行事が日本の各地にあり、単に火焚き、トンドと呼ぶ土地も多い。千束柴、千駄

焚きのごとく、トンドや篝の火の盛んなことを誇称する名称が広く分布している。この語は千垢離・千度詣・千度申し、さらに廻れば百万遍念仏などと同じ種類の信仰から出たものであろう。すなわち神仏への祈願に際し、その数量の多きことによって目的を達しようとする信仰と同じ動機から出たものと考えられる。この点は松明の行列についても同じである。

(4)土器に油を焚く灯明もおそらくは薪を焼く篝火と本来同質のもので、ともに神前を照らし、祭場を明るくする灯し火であった。百灯明や千灯明などと称し、雨乞に数多くの灯を神前に灯し連ねるのも、千束柴や千本松明と同じ信仰に由来する。

(5)近畿地方の山上火焚きの事例として、神戸市の垂水区方面が知られていた。たとえば名谷の滑では、祇園さんの山に村中の村人が麦藁二〇把ずつを持ち寄って火を焚き、鉦と太鼓で囃し、唱え言をした。『飾磨郡風俗調査』(一七四頁)には「氏神社に燈明を献じ、其火を各自松明に移し、列をなして附近の山嶺一定の所に集り松明を燃して帰る」とある。

(6)近畿地方でマンドなどといわれる盆行事との関係も考えられる。例えば、大阪府池田市のお盆のガンガラ火もやはり山上から松明を持って下りてくる。ここには釣鐘火と称して、山で釣鐘形の火を焚く行事もあった。盆の火祭りは精霊を迎え、送るための火と解せられるが、関東における盆の百八灯行事などは雨乞行事と極めてよく似ている。

(7)虫送り行事も雨乞の火祭りときわめて類似している。虫送りを目的として、松明を連ねて田を廻り、最後は村境にこれを捨てての行事は全国的な分布がある。一方、雨乞にもこれとまったく同様の方法が用いられていた。ただ唱える文句が虫送りでは「稲の虫送った」といい、雨乞では「雨たんもれ」と呼びかけるのが異なるだけであっ

た。

高谷の研究で報告されている雨乞の火祭りは、松明などの火そのものによる行事であり、行灯や提灯などの灯火を用いる行事ではない。つまり、雨乞に火祭りを行なうのは、大火を焚いて、雲をあぶり、焼き、また雲や天を破って直截的に雨を降らせようとする発想からきている。

本稿で検討するのは嘉永五年の兵庫津の事例であるが、それより以前に、その町々が行なっていた雨乞記録を『兵庫岡方日記』⁽¹⁵⁾に見つけることができた。

享保五年（一七二〇）七月二十六日条にこのように記されている。

一、右同日夜廿七日夜廿八日夜三夜、摩耶山之火ヲ灯松明二而、雨乞ヲ致、三方町々も志次第松明持出ル筈ニ触廻し申候事

二六日夜から三晩続けて行なわれた雨乞とは、兵庫津の三方（岡方・北浜・南浜）の町人が、雨乞に靈験あらたかな摩耶山に松明を持って火をもらいに行く行事だと思われる。摩耶山とは現灘区の切利天上寺のことである。高谷は『西灘区史』の記述「切利天上寺の」寺宝に雨乞面あり。昔、奈良の春日大社に天降りし三面の一。一は奈良の今（金）春太夫、一は丹波の梅若太夫、一は摂津兎原郡上野村の幸太夫に伝わる。摂津のものが今この寺にある」⁽¹⁴⁾を引用している。猿楽に関わる雨乞面伝承をもつ摩耶山切利天上寺に火をもらい受けに行く雨乞が行なわれていた。

また、兵庫津近隣では翌嘉永六年（一八五三）にも雨乞が行なわれている。『要向日記』⁽¹⁵⁾によると、夏季に何度か雨乞が行なわれている。六月二六日、三宮において雨乞祈禱が執行されているが、この日、雨乞百灯百座祓のため、篝の用木の松木伐取りの準備が行なわれている。七月五日には生田宮において雨乞の火振り、翌六日の雨乞では百姓代と百姓頭一人が生田宮に参詣し、火を受けて町々へ移し、町では高張提灯で行列した。七月一六日の記述は詳細である。一六日夜より三夜、生田宮において机床三脚の四方へ笹を立て、高張提灯二張をともし、神前へ幣三

方を四ツ、御鏡餅三重を供えた。三重で一升の餅、お神酒は二瓶である。御祈禱中、神前より火を受け、西之町より順々に火を移していく。また、雨が降ったら返礼の雨悦びの行事も行なわれる。

『要向日記』からわかることは、雨乞は三宮、生田宮、再度山大龍寺などの宗教行事であること、三夜連続行なわれること、町政組織に位置づけられる役人が関わる政治的行事であることなどである。いずれにしても、雨乞の火祭りには寺社、霊山など何らかの宗教施設が関与していることがわかる。

②近世都市兵庫津

嘉永五年の雨乞の舞台となった近世都市兵庫津についてみておこう。⁽¹⁶⁾

兵庫津の原型は、天正八年（一五八〇）に信長から摂津国を与えられた池田恒興によって、兵庫城を中心に整備された惣構型の城下町に求められる。町場は都賀堤とよばれた惣構の中に、西国街道の宿駅としての機能を持つ岡方と、港湾機能を担う浜方（北浜・南浜）という二つの機能を内包する形で整備されていた。つまり、宿場町の兵庫宿と港町の兵庫津の二面を有していた。雨乞の舞台となるのは、岡方と呼ばれた兵庫宿を構成する町々である（二六二頁の「兵庫津略図」を参照）。江戸時代前期に宿駅制が整備されて以降、兵庫津の繁栄に引きずられるように、兵庫へ迂回する道が山陽道の本道となった。すなわち京より下ると、湊川河口の堤を越えて兵庫津の北の入口である湊町惣門に至り、市中を真っ直ぐ南下して南中町の高札場に突き当たって西へ折れ、神明町と逆瀬川町の旅宿街を通って柳原惣門から津外へ出て、須磨方面へ向かった。兵庫津は幕府の宿駅指定を受け、瀬戸内海を航行する船にとって重要な寄港地であっただけでなく、本陣や問屋場などの設備が整えられ、岡方に属した町々は駅所維持（人馬継立業務の陸役）を負担した。参勤交代の

西国諸大名は、公用通路として山陽道を利用し、兵庫に立ち寄り活気を呈した。ことに寛文一〇年（一六七〇）頃から西廻り航路が発達して、北国の物資が海路下関を迂回して直接大坂に輸送されるようになり、さらに松前航路の開拓によって、松前の物資が兵庫に運ばれるようになった。このように商業の発達に伴って問屋・仲買の数も増えていった。

兵庫津は元和三年（一六一七）以来、尼崎藩の支配下に置かれていた。延享三年（一七四六）の『兵庫津明細覚書』（種井家文書）によると、家数四三四七、人数二万九〇一で、漁師一八六八人、水主約一九八〇人、船大工一八三人という海陸交通の要衝でもあった。北と南の浜方、岡方の三方にはそれぞれ惣会所が置かれ、町政を分担した。各町には、藩から組頭が任命されて町内をまとめ、その下に五人組頭が置かれた。三方それぞれに、名主二〜三名が藩から任命されて町々を統括し、惣代（一〜二名）がその下で実務を処理した。さらに延享三年の兵庫津には、百姓二三五人が含まれている。耕地があり、百姓のいる町を地方じかたと称して、その処務のため庄屋が一〜二名任命されていた。藩ではこの兵庫津管轄のため、堀に囲まれた兵庫城跡に陣屋をおき、兵庫奉行を常駐させ、数名の藩士をその許に付属させて統治にあたらせた。

明和六年（一七六九）、幕府は兵庫津を尼崎藩から取り上げて天領に編入した。間もなく株仲間の組織が認められ、彼らの扱う商品の量は次第に大坂を圧倒するような形勢すらあった。兵庫から神戸村にかけては酒造業・水車業や廻船・渡海船による水運業も展開された。

寛政八年（一七九六）の「兵庫津各町家数人数書上」（安田家文書）によると、兵庫津は四五町と一村（行政的には算所村）から成り、うち岡方は二八町一村、浜方は北浜一一町、南浜六町の構成であった。このうち岡方の相生町、北浜の東川崎町は現中央区にあたり、それ以外はすべて兵庫区に相当する。また岡方の一七町と一村には農民が集住し、「地方十八町」と称せられた。嘉永五年六月の雨乞には岡方の町々のう

ち、二六町一村（地方の一五町と一村を含む）が参加したのである。天保九年（一八三八）には兵庫津の家数六八八四（本家二一五八、借家四七二六）、人口一万九七九一人と報告されている。

③ 『嘉永五子年六月 福原雨乞記』

神戸市立博物館蔵の『嘉永五子年六月 福原雨乞記』は一七丁、縦二五・〇×横一七・九センチ、紙本淡彩の写本である。「福原雨乞記」の文字が題箋に見立てた枠で囲まれ、天秤棒に結ばれた釣鐘と鉦打ち太鼓が彩色で描かれている。なお、本文に則り、「挑灯」と表記する。

冒頭にこの雨乞の顛末ともいべき事項が記されており、以下の一一項目に要点をまとめることができる。

- ① 摂州福原庄兵庫津では、雨乞が一九年以前に行なわれたことがあった。
- ② ことし嘉永五子年は初夏の頃より日照が続く、「困方極付」であった。
- ③ 六月五日夜より三日之間、町々より練物・見附台・纏・挑灯・ゆかた・襦袢を揃えて参加した。その鹿図（略図）は左の通りである。
- ④ 町々の年寄や五人組頭は火消装束や陣笠を着して各組の前後に付き添い、三日間、昼の午刻（正午）に人数を揃え、順番に西出口（柳原惣門）から惣門外に練り出す。
- ⑤ 西国街道を通り、五、六丁（六百メートル程）西の新地堤において勢揃いする。
- ⑥ 薄暮になると松明へ一斉に点火する。その早き事、花火に火がつく如くである。
- ⑦ 数拾丁の間（何キロにもわたって）、一斉に松明に点火する。
- ⑧ 先手より段々に、北の辺り湊川の上手に出て、ここで全ての松明を競って川に捨てる。そして、高張挑灯に点火する。

⑨行列は川上を横に通り抜けて有馬道へ出る。それより西国街道へ下って湊川へ戻る。

⑩湊川の中（河川敷や中洲など）に仮小家を建てて、御勤番御役人衆中をはじめとして、地方庄屋や年寄共は厳重な警戒体制に入っている。

⑪行列はその前を通り、京口（湊町惣門）より練り廻り引き取る。

先ず、この雨乞で注目されることは、寺社や、霊山とは何ら関係ないことである。松明に点火する種火は、ある宗教施設から受けている可能性はあるが、その記述はない。福原庄とは六甲山地西部南麓の、旧湊川の中流域を中心とした八部郡の庄園であるが、その地名が近世まで慣習的に用いられていた、とみることができよう。

卷末には、惣人数一万三百人余り、外に北浜と南浜の町より加勢人足五〇〇〇人、松明一二〇〇、半鐘四〇七、太鼓三〇四、大釣鐘四、八丁鉦三〇、法螺貝六三、弓張挑灯七一二〇張とある。参加人数を見ると、切戸と湊町が群を抜いて多く、両町とも人口の二倍以上の参加者があり、多くの加勢人足を雇っていることがわかる。加勢人足の助力は「雇人足」とあるので当日に雇われたものであろうが、これは近世の都市祭礼にも非常に多い慣行である。

一つの町の行列の前後には高張挑灯が四本、湊町のみ八本が従う。このような大人数参加の背景には雨乞の共同祈願の心理がある⁽¹⁷⁾。雨乞は共同の行事であり、一戸から一人必ず参加しなければならぬという伝承が特に村落部では厳しく守られてきた。そうしなければ雨乞には験が現れないと信仰されていたので、負担の平等だけが必ずしも全戸参加の慣行の動機ではなかった。村落部の雨乞には水利組織に基づいて数か村

表1 町ごとの参加人数、松明と鳴物の数、加勢人足情報（『嘉永五年六月 福原雨乞記』より）

町名	人数	松明	半鐘	太鼓	挑灯	備考
1 佐比江町	350	250	35	20	180	加勢は島上町浜中、八丁鉦5 雇人足陣笠
2 魚棚町	150	100	10	8	100	
3 小物屋町	150	100	10	5	100	
4 江川町	150	100	7	5	100	加勢は宮前町浜中 雇人足残らず陣笠
5 富屋町	180	130	10	8	150	
6 東柳原町	300	200	8	6	200	八丁鉦19 挑灯は残らず陣笠
7 西宮内町	850	500	50	35	500	
8 西柳原町	400	300	20	13	300	法螺貝50
9 新町	150	100	5	3	80	
10 南中町	200	150	8	5	150	八丁鉦10、法螺貝8
11 切戸町	2000	1500	55	40	1500	
12 烏屋町	100	60	8	6	60	雇人足残らず陣笠
12 細辻子町	100	60	8	6	60	
13 磯之町	200	150	15	10	150	雇人足残らず陣笠
14 逆瀬川町	600	450	20	15	500	
15 門口町	150	100	10	8	100	雇人足残らず陣笠、釣鐘1
16 小広町	200	100	10	5	120	
16 神明町	200	100	10	5	120	加勢は宮内町浜中 江戸挑灯数多
17 木戸町	150	100	8	5	100	
17 木場町	150	100	8	5	100	法螺貝5
18 鹿屋町	80	50	7	7	50	
19 三川口町	300	150	20	15	150	江戸挑灯揃え
20 相生町	400	300	15	20	300	
21 産所村	200	150	8	7	130	大釣鐘3
22 北中町	300	200	8	6	200	
23 永沢町	250	200	7	10	200	差渡し(直径)4尺の太鼓2
24 湊町	2500	1800	50	30	2000	

合同で行なうものもある。兵庫津の場合も岡方の町々のほとんどが参加している。兵庫津の事例は、村中が松明を持って行列を作って氏神などを出発して村の境を一周し、霊山に登り、河原に降りてきて松明を積んで燃やす千本松明（奈良では火振りと呼ぶ）行事の都市型と想定できる⁽¹⁸⁾。千本松明行列では鉦・太鼓・法螺貝などを鳴らしながら歩くことが多く、兵庫津の場合は先述したように松明一二〇〇本である。農民が集住する「地方十八町」のうち一六町が参加しており、日照りは農業にとって深刻であったことをうかがわせる。稲の生育期の旧暦六月初旬における降雨の多寡は、稲作にとって死活問題であったからである。

以下、特徴的な出し物と参加町について検討する。

表3 参加者の装束と練物（『嘉永五子年六月 福原雨乞記』より）

町名	参加者装束と練物
佐比江町	襦袢奈良晒，黒雲に稲妻模様，但中走世話方湯衣揃え
魚棚町	奈良晒襦袢，鱗形模様揃，唐相すり（摺り）パッチ鱗形をすり
小物屋町	奈良晒襦袢，黒雲に稲妻模様揃え世話人湯衣 業平吾妻下り練物
江川町	奈良晒襦袢，唐相すり ぱっち唐相すり 中走世話方同様ゆかた
富屋町	麻かた絞り，ゆかた揃え，蛤取りの出立
東柳原町	奈良晒襦袢，唐相すり田に月模様揃え
西柳原町	奈良晒襦袢，松海浪唐相すり揃え，中走世話人同様ゆかた揃え
新町	各々山伏揃え出立揃え
南中町	龍宮乙姫浦嶋太郎練物，雇女数三人出す，何れも魚生もの行灯を頭に被き火灯す，百人斗り
切戸町	但し東組，中組，新地組と三手に分る，襦袢黒雲に稲妻落雷模様，そのほかいろいろ不同
磯之町	練物狐娘人数夕（多）揃え，中走世話人若中模様湯衣揃え
逆瀬川町	奈良晒襦袢，絵扇短冊模様，雨乞小町の気とり揃え
門口町	襦袢雷模様揃え
小広町・神明町	稲妻模様湯衣揃え
木戸町・木場町	奈良晒襦袢，唐相すり水すり大字
鹿屋町	練物不二（富士）牧狩，頼朝公仁田四郎五郎丸曾我兄弟工藤祐経 其外雑合数多出立
三川口町	蛙の姿にて出立
産所村	襦袢ゆかた船頭の姿にて出立
北中町	火消装束に揃え
永沢町	練物道成寺，白拍子坊主出立
湊町	襦袢ゆかた共不同

表2 参加人数・町の人口と家数・地方（じかた）情報

町名	参加人数	人口	家数	地方
佐比江町	350	102	22	
魚棚町	150	196	30	
小物屋町	150	221	31	
江川町	150	278	70	地方
富屋町	180	155	40	地方
東柳原町	300	589	85	地方
西宮内町	850	671	113	地方
西柳原町	400	407	76	地方
新町	150	327	77	
南中町	200	354	51	地方
切戸町	2000	810	110	地方
鳥屋町	}	16	8	地方
細辻子町		126	27	地方
磯之町	200	287	64	
逆瀬川町	600	1000	121	地方
門口町	150	481	86	地方
小広町	}	92	17	
神明町		200	145	26
木戸町	}	110	24	
木場町		150	77	18
鹿屋町	85	164	27	地方
三川口町	300	415	85	地方
相生町	400	26	6	
産所村	200	340	37	地方
北中町	300	188	30	
永沢町	250	423	70	地方
湊町	2500	1127	162	地方

註 人口と家数は寛政8年（1796）の「兵庫津各町家数人数書上」（安田家文書）。参加人数は『嘉永五子年六月 福原雨乞記』による。

- 1 佐比江町の雷神を描いた見附行灯の頂にはダシ飾りがあり、黒雲に稲妻模様の装束の人々が持ち歩く。
- 2 魚棚町は町名に因む鯛の見附行灯を鱗形模様の装束の人々が持つ。北浜の島上町浜中から加勢も参加しているが、これは「雇い祭り」といわれる、周辺農村などから祭礼の雑用のために人足を雇い入れる例と同様であろう。
- 3 小物屋町には江戸時代を通じて岡方名主をつとめた正直屋（種井家）と岡方惣会所があり、町名を記した町印には威厳があったともいえる。見附挑灯を先頭に、在原業平の吾妻下りの練物が続く趣向である。4の江川町も見附挑灯。
- 5 富屋町は住吉高灯籠の見附台に火を灯し、行列の人々は蛤取りの出で立ちで摂津住吉の浜をイメージさせる。住吉高灯籠は航海者にとっても、猟師にとってもランドマークとして有名であった。見附挑灯も参加する。
- 6 東柳原町の見附行灯は回転式のからくり行灯で、水に因む和歌が記され雨乞を連想させる。
- 7 西宮内町の見附行灯は、籠に集められた朝顔自体が小挑灯の集合体という細工物である。
- 8 西柳原町は登竜門説話の鯉の滝登りを見附台にしたもので、火が昇り下りするというからくりの趣向がつく。
- 9 新町の見附行灯は巨大な法螺貝であり、山伏姿の人々が法螺貝五〇を吹き鳴らして参加する。

- 10 南中町は龍宮の乙姫と浦嶋太郎の練物であり、雨乞の練物として他所でもみられる。例えば、大津市尾花川区有文書にある幕末の雨乞図巻には龍宮殿の山車行列が描かれており、雨の神としての龍や八大龍王からの連想によるものである⁽¹⁹⁾。それにしても百人もの人が各自、魚類の行灯を頭に被いた壮観さはいかばかりであったろうか。中心は蛸の見附行灯である。
- 11 切戸町の見附行灯は雷神がテーマであり、黒雲に稲妻落雷模様の装束で行列した。稲妻に張るモミは、紅で無地に染めた絹布である。
- 12 15川口町の見附纏、20相生町の見附行灯と似ているが、見附挑灯としておく。
- 13 磯之町は見附行灯の後に、狐の嫁入りの練物が続く。いうまでもなく、狐の嫁入りとは日が照っているのに細かい雨が降る現象をいう⁽²⁰⁾。狐火を狐の嫁入りというところがあり、柳田国男は嫁入りの提灯行列を思わせる狐火の名称が、日和雨に転用されたのであろうと推定している⁽²¹⁾。
- 14 逆瀬川町は「雨」字の見附行灯である。
- 16 小広・神明町の見附台の造り物「米俵上の白鼠」は大黒⁽²²⁾富をイメージしたものとされる。両町が連合して参加したのは、本陣五軒、旅籠屋三軒が存在し、併せて旅籠町と呼ばれたからであろう⁽²²⁾。
- 17 木戸・木場町の見附行灯は両町の町名に因む「木」字を象り、「木」字を染めた装束で参加した。
- 18 鹿屋町の見附台「頼朝の富士の牧狩」も近世に人気のある造り物の趣向である。あたかも箱庭のように物語が作られたのであろう。行列には担がれ、停止時にはこのまま置かれたのであろう。
- 19 三川口町の見附台の造り物「柳に蛙」は百人一首からとられたものであろうか。
- 20 相生町の見附行灯にも雲か、雲龍か、雨のイメージの絵が描かれている。雨乞には呪術的な面と宗教的な面があるが、堀哲は、雨乞の呪術をジェームス・フレーザー⁽²³⁾の「説く模倣呪術説」で解釈する。そのうち最も顕著なのは、水をもって水を引き出すという方法であり、神水受け、淵の水干し、百枩洗い等の雨乞法をその例としてあげている。高谷は「これらの雨乞法を模倣呪術の理論をもって片付けるのは無理」とし、反駁の事例として、遠くの新仏から水を迎えて来て氏神に供えたり、田に撒く等の「神水受け」の雨乞法をあげている⁽²⁴⁾。「神水受け」を模倣呪術として理解するフレーザーの理論によるならば、水を撒けば類似の現象として雨が降るはずであり、名社・大寺の水である必要はない、という。
- 21 産所村は行政的には岡方唯一の村である。明和七年（一七七〇）には村内で定芝居一軒の株が許可され（天明八年（一七八八）「兵庫津地方地子方石高町数等覚書」、明治二年（一八六九）の「兵庫津絵図」（「神戸市史」）には村の中程に芝居小屋が記されている⁽²⁵⁾。このように、芸能・役者に関わる地域であったため、芝居の道具のような船車に仕立て、帆柱を松明という趣向で参加している。
- 22 北中町の見附纏は、火消装束、「雨」字行灯、江戸挑灯（町火消を連想）により、雨によって火を鎮める消火活動をイメージさせる。
- 23 永沢町は大釣鐘三つと、「垂れ桜に釣鐘」の造り物、見附台の後に、白拍子、坊主の出で立ちの者による道成寺の練物が続く。鐘と雨乞に関して、鐘を淵・川・池などの水中に浸けて雨を乞う、鐘に雨を祈る等がある⁽²⁶⁾。鐘を水中に浸けるのは、雨を司る龍神が鐘を好むので、鐘を水中（龍神は水中に棲むと信仰された）に入れば、喜んで雨を降らす、という説明がなされる。鐘ヶ淵・鐘ヶ崎などの、いわゆる沈鐘伝説はこれに基づく。鐘の龍頭（鐘の頭部にある龍の形を模した釣手）と雨乞法とのかわりを説く土地も多い。鐘との連想から、紀州道成寺の造り物や練物を出す雨乞行事は、他所でも

見受けられる。熊本県天草郡本戸村（現本渡市）では、雨乞に安珍清姫の造り物、すなわち鐘に大蛇の巻きついた造り物を作って海に投げ込む。雨乞の芸能である太鼓踊りで山伏の登場する鐘巻踊りは、道成寺の縁起が唄い込まれている。この踊り歌は近畿一円と阿波の一部に分布しているが、近世の音曲によってこの物語が脚色せられて以降の展開である。永沢町の練物の白拍子とは清姫、坊主とは安珍の仮装であろう。

24 湊町の纏行灯は、矢車の提灯が廻る仕掛けになっているので纏行灯という名称なのであろう。これが巨大な和ろうそく行灯と組み合わせられているところが興味深い。

先述した『要用向日記』によると、翌嘉永六年七月一日より一三日までの三夜においても兵庫津雨乞火振りが多いに賑わったとある。連年にわたり、このような灯火の風流が行なわれたのかもしれない。

おわりに

九〇年代以降、考古学・建築史・歴史学・絵画史・地理学などの諸科学を中心に、学際的、総合的に近代以前の都市の様相を明らかにする試みが進展してきている。この研究動向は行政発掘という現実とリンクし、都市のハード面の調査・研究が中心であり、史料の制限上、そこに繰り広げられた住民の生活史復元の試みが後追いになっている。近世生活史の分野では、近世文学研究が風俗史的に主導しているといってもよい。

都市を舞台として行なわれた年中行事や祭礼などの研究は、高牧實や植木行宣⁽²⁸⁾などの研究によって進展している。

本稿で対象とした雨乞などの臨時の行事の画像資料に関しては、名古屋を描いた資料の研究蓄積が進んでいる。慶応三年（一八六七）の名古屋のええじやないかを描いた蓬左文庫『青窓紀聞』には、天狗の巨大な

懸け行灯や提灯行列が詳細に描かれている。⁽²⁹⁾名古屋市立博物館や同館学芸員の山本祐子⁽³¹⁾によって、高力猿猴庵や小田切春江に関する研究も進展しつつある。

今後は全国的な比較研究を行なうことによって、都市風流史の研究は飛躍的に進むであろう。

註

- (1) 『日本の祭』弘文堂、一九四二年、『神道と民俗学』明世堂書店、一九四三年。
- (2) 前掲『日本の祭』。
- (3) 守屋毅「夜景と都市祭礼」『近世芸能文化史の研究』弘文堂、一九九二年。「火の風流」『山・鉾・屋台の祭り―風流の開花―』白水社、二〇〇一年。
- (4) 「祝い絵―デイスプレイの民俗誌―」石川県立歴史博物館、二〇〇〇年。
- (5) 大門哲「目録・行灯絵・絵師―イベント・デイスプレイの実態と変容―」『石川県歴史博物館紀要』第二二号、一九九九年。
- (6) 註(3)。
- (7) 図録は註(4)。
- (8) 植木行宣前掲書(三〇九頁)によると、囃子によって囃されるヤマ系の灯籠山に分類される。
- (9) 註(5)。
- (10) 小嶋博巳「雨乞い」『日本民俗大辞典』吉川弘文館、一九九九年。
- (11) 法政大学出版局、一九八二年。
- (12) 前掲『雨乞習俗の研究』。
- (13) 『兵庫岡方文書』第六輯第一巻、神戸市教育委員会、一九九〇年。
- (14) 前掲『雨乞習俗の研究』。
- (15) 本史料については神戸市立博物館学芸員の高久智広氏にご教示いただき、同博物館より史料写真を複製させていただいた。
- (16) 兵庫津の歴史的記述に関しては、高久智広「近世期兵庫津北浜における浜先地開発と屋敷割の変化について」『神戸市立博物館研究紀要』第一八号、二〇〇二年三月、『新修神戸市史』歴史編Ⅲ近世 神戸市教育委員会、一九九二年、『日本歴史地名大系 兵庫県の地名』平凡社、一九九九年、前掲『兵庫岡方文書』第六輯第一巻「解題にかえて」を参照した。
- (17) 前掲高谷重夫『雨乞習俗の研究』。
- (18) 同右。

A Refined Lantern Procession to Pray for Rain: the Case of Hyogotsu at the End of the Edo Era

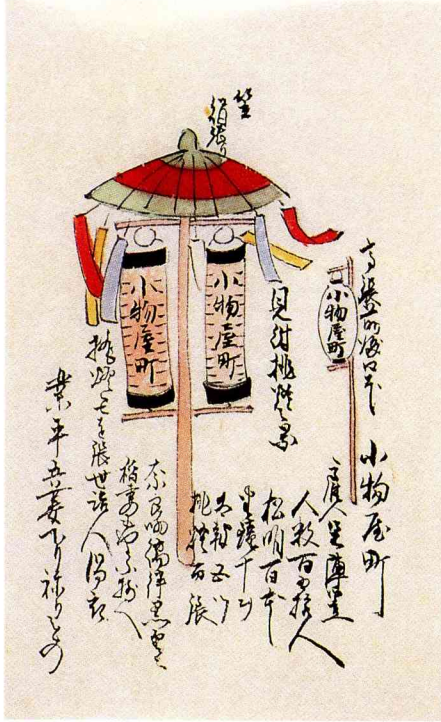
FUKUHARA Toshio

Starting on the third day of June 1852, the 27 machi of Hyogotsu (currently the 26 machi in Hyogo-ku and Aioi-machi in Chuo-ku, Kobe City) took part in a grand lantern procession along the Saigoku-kaido in which they prayed for rain. This paper looks at this refined “tsukuri-mono”, which may also be described as a pageant of light, color and sound.

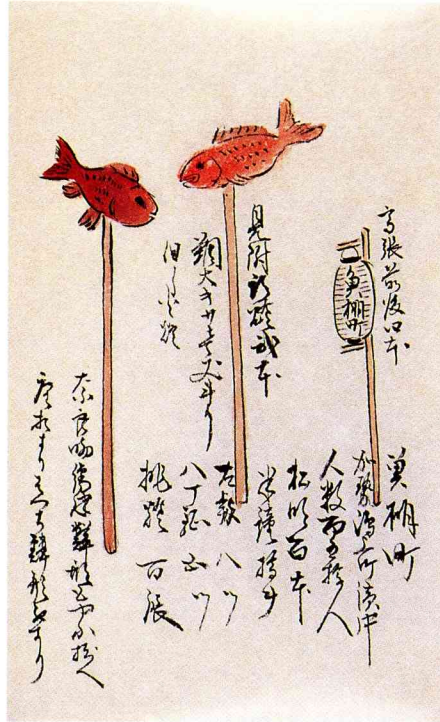
The practice of praying for rain is associated with prayers by mountain ascetics, and as such is an exceedingly religious practice. However, the practice of praying for rain described here is too ostentatious for a ritual performed at a time of crisis, and from the illustrations contained in the newly found “Fukuhara Record of Prayers for Rain in June 1852” it is a lively and entertaining procession of the kind one would see at a parade at a theme park. It resembles a festival parade that is aware of the gaze of onlookers.

At the end of this document it is recorded that a total of more than 10,300 people took part in the procession, as well as 5,000 helpers from Kitahama and Minamihama, 1,200 torches, 407 small hanging bells, 304 drums, 4 large hanging bells, 30 “hatcho” bells (usually attached to the body), 63 conch shells and 7,120 hand-held lanterns. The method of praying for rain for the villages involved the villagers using the bells, drums, conch shells, etc. to produce noise at the same time as they were forming a procession in which the participants held torches as they departed from the site of the tutelary deity, completing a circuit of the village, climbing a nearby sacred mountain, descending to the banks of a river where they gathered the torches together in a bundle and burned them in a practice known as the “thousand torches” (senbon shomei). We may assume that this example from Hyogotsu was an urban version, although peasants living in 16 of the 18 towns in the area within Hyogotsu took part in the procession, which suggests the seriousness of the continued dry weather for farming. For rice cultivation, the amount of rain that falls in the beginning of the sixth month following the lunar calendar when the rice is starting to grow is a matter of life or death.

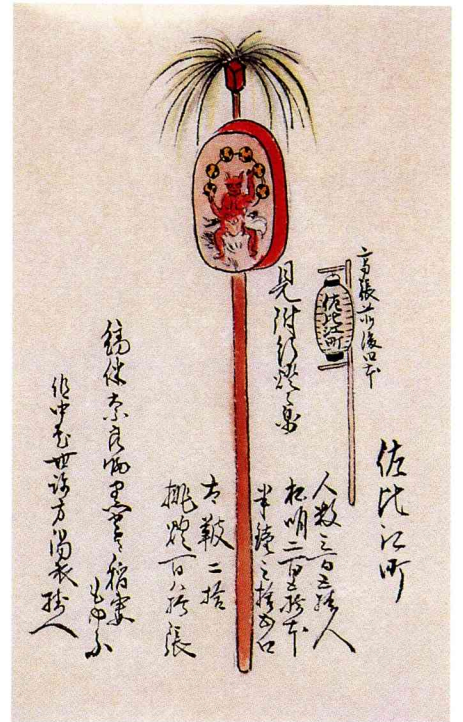
Unlike the annual events that are repeated each year, practices like praying for rain that are special one-off practices display the creativity of each town and truly exhibit the spirit of refined practices (furyu).



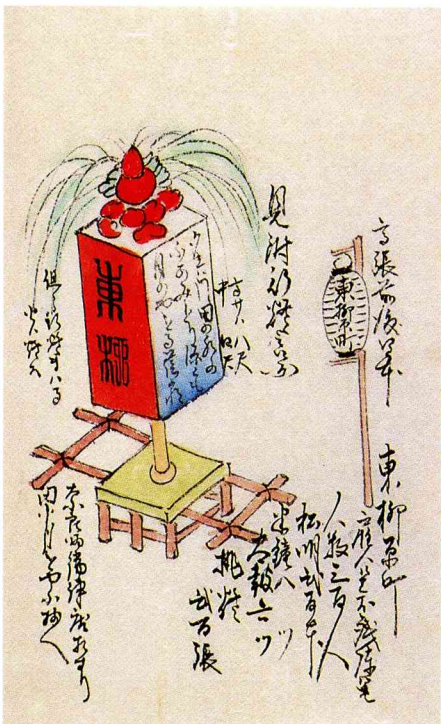
3 小物屋町 見附挑灯之図
笠絹張り 挑灯モミ張



2 魚棚町 見附行灯二本
鯛大キサ一丈斗り但シ小灯

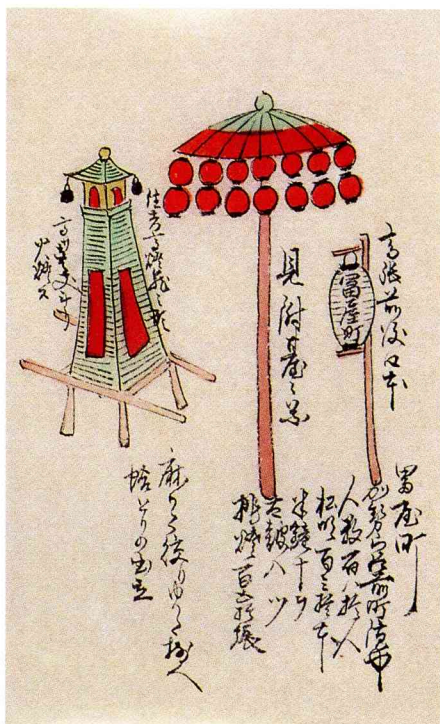


1 佐比江町 見附行灯之図



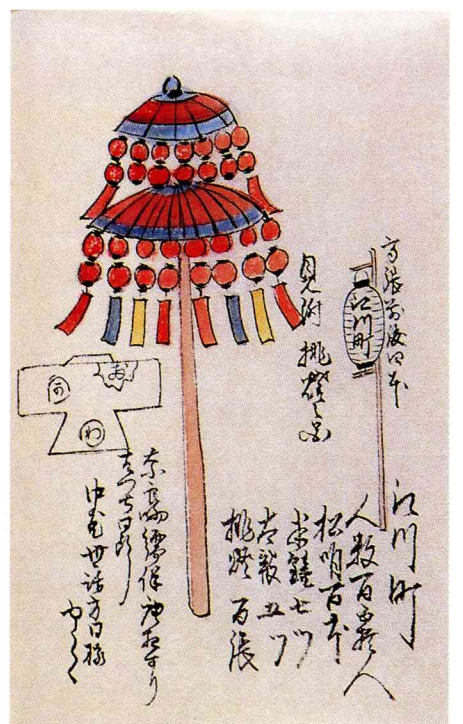
6 東柳原町 見附行灯之図

高サ八尺 中四尺 但シ行灯まはる火灯ス
(行灯の文字「東柳」「夕立ハ門田の水のふ
かみとり 深くも月のやとる蔭かな)



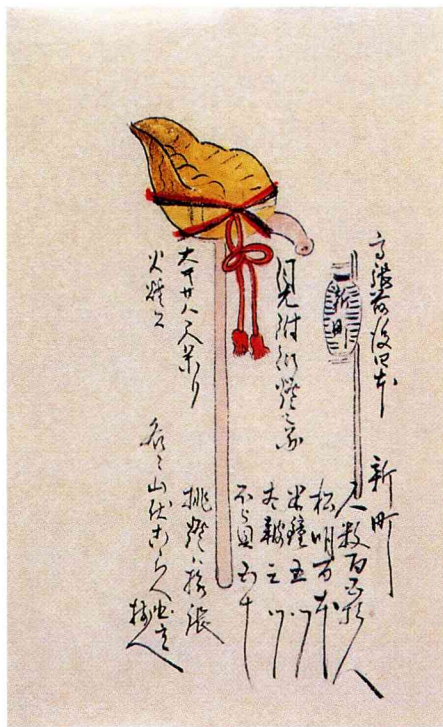
5 富屋町 見附台之図

住吉高灯籠之形 高サ一丈斗り火灯ス (福
原註一右は見附挑灯)



4 江川町 見附挑灯之図

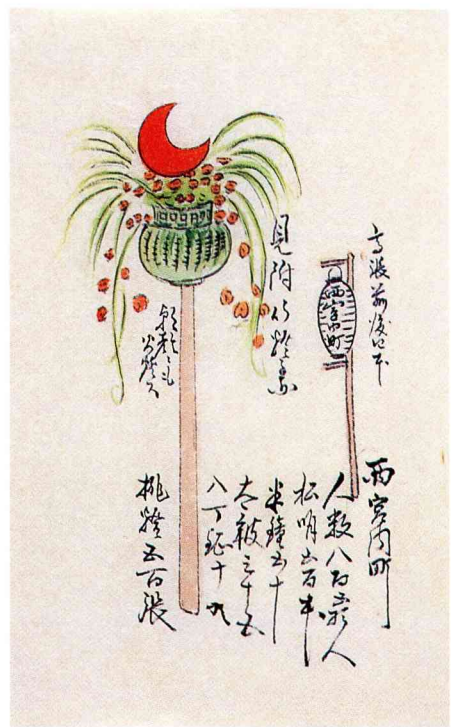
『嘉永五子年六月 福原雨乞記』(神戸市立博物館蔵) 挿絵 (参加町名, 造り物名称, 造り物情報)



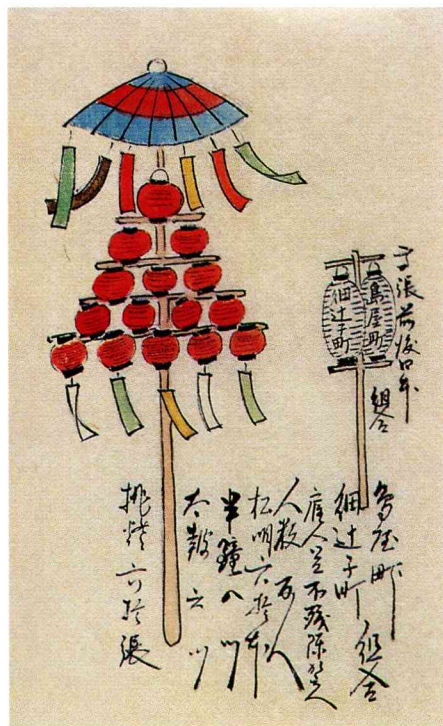
9 新町 見附行灯之図
大キサ八尺余リ 火灯ス



8 西柳原町 見附台之図
緋ハリ鯉壱丈余リ 火煙原二而上り下リスル



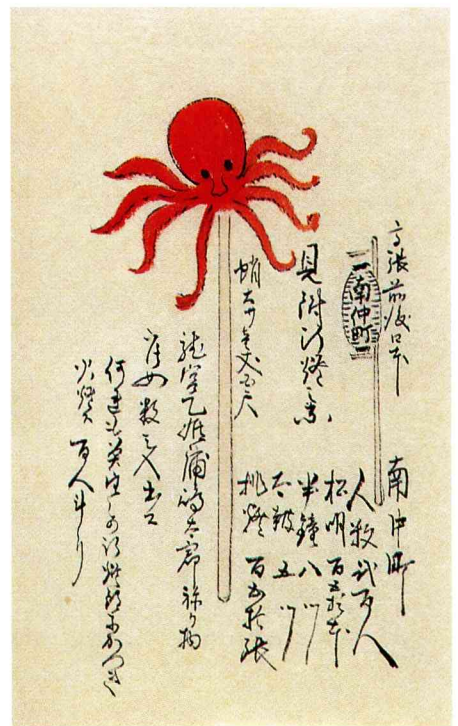
7 西宮内町 見附行灯之図
朝顔ニも火灯ス



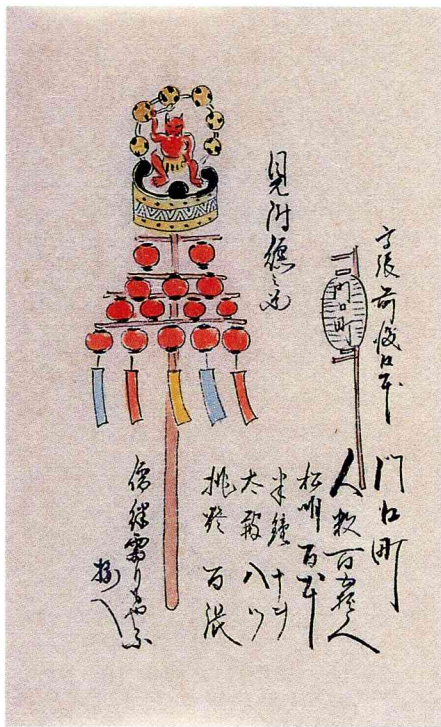
12 鳥屋町・細辻子町組合
(福原註一見附挑灯)



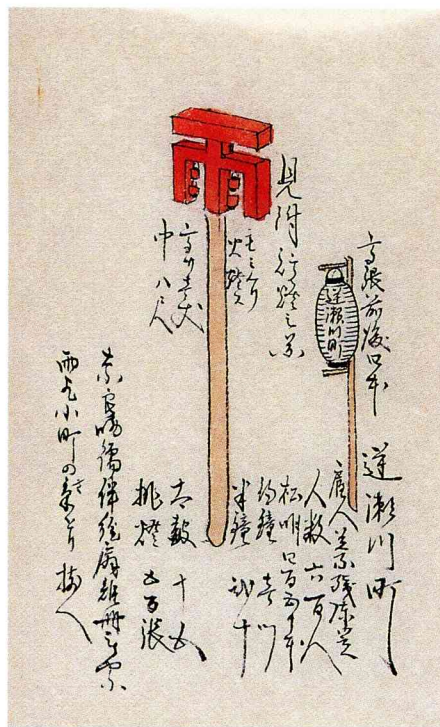
11 切戸町 見附行灯之図
火灯ス 稲妻モミ張り



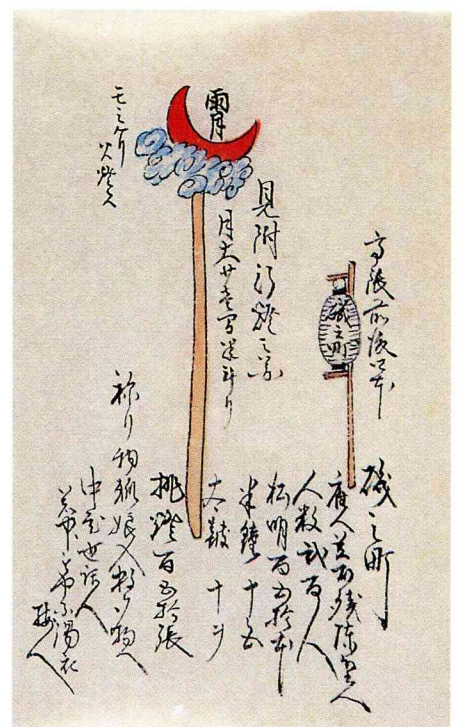
10 南中町 見附行灯之図
蛸大サ壱丈五尺



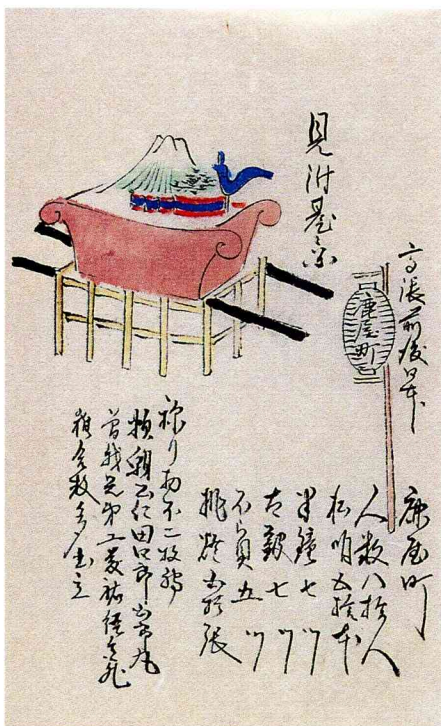
15 門口町 見附纏之図



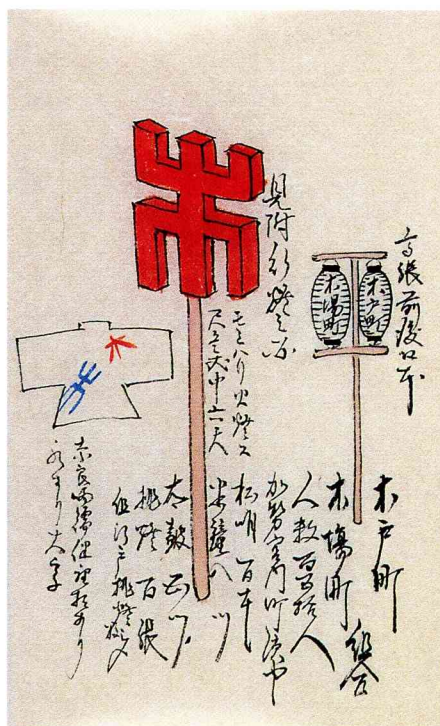
14 逆瀬川町 見附行灯之図
モミハリ火灯ス 高サ壹丈 中八尺



13 磯之町 見附行灯之図
月大サ壹間半斗リ モミハリ火灯ス



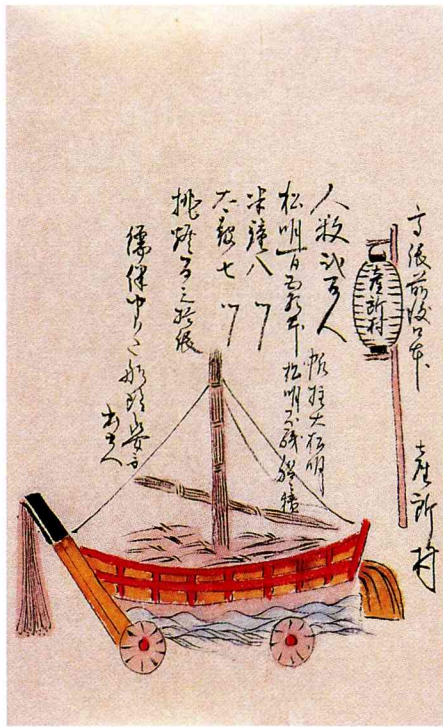
18 鹿屋町 見附台之図



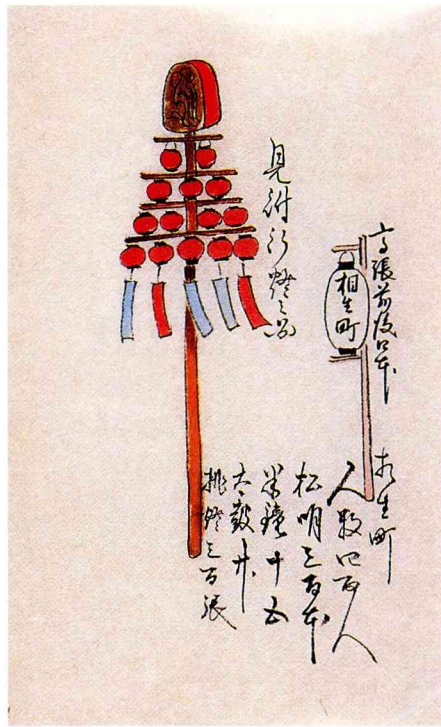
17 木戸町・木場町組合 見附行灯之図
モミハリ火灯ス 尺壹丈中六尺



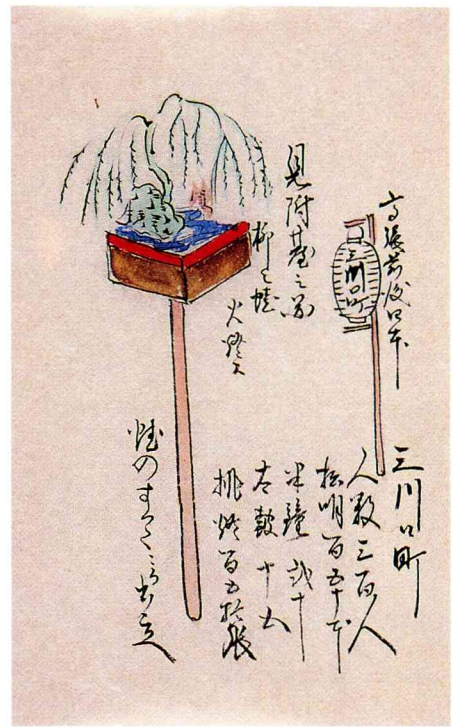
16 小広町・神明町組合 見附台之図
絹張り火灯ス



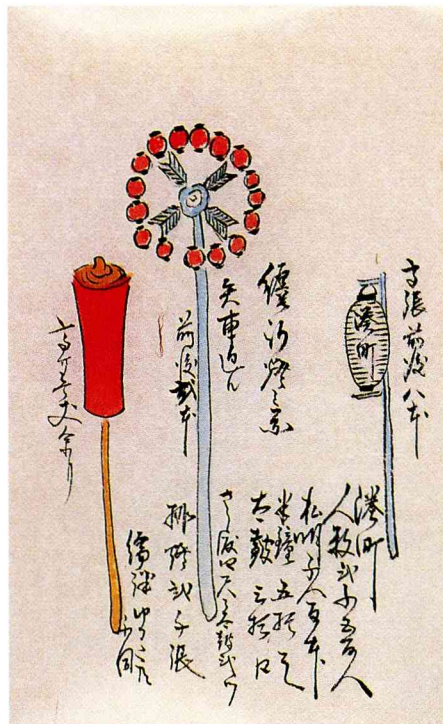
21 産所村 帆柱大松明
松明不残船二積



20 相生町 見附行灯之図

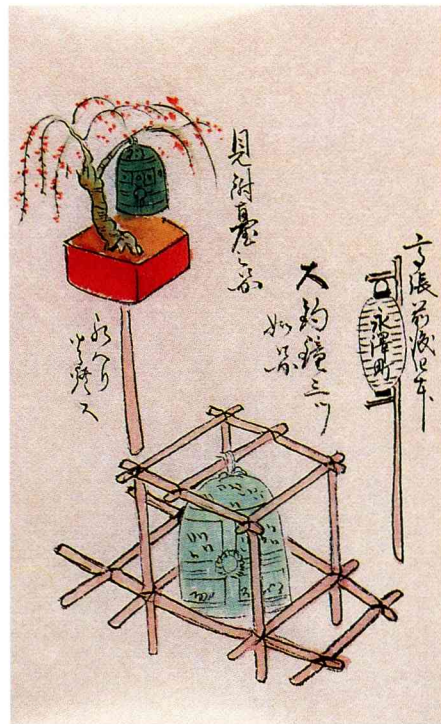


19 三川口町 見附台之図
柳二蛙 火灯ス



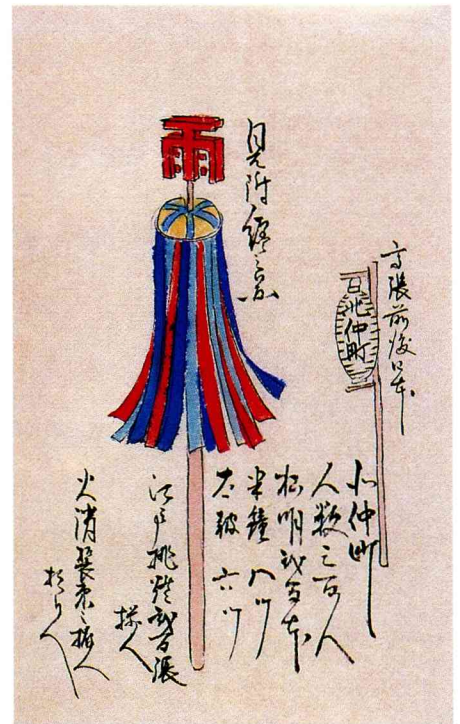
24 湊町 纏行灯之図

矢車廻ル 前後二本 高サ壹丈余リ (福原註一左ろうそく)



23 永沢町 見附台之図

紅 (モミ) ハリ火灯ス



22 北中町 見附纏之図